

おにがつらやま
鬼面山とヒメサユリ

数年前、新潟県と群馬県にまたがる花の山として有名な平標山^{たいらっぴょうやま}へ登った時のことである。樹林帯を抜け、お花畑に差し掛かる手前に小さな山荘があり、コーヒーを頂いた。泊り客が立ち去った山荘に、お客は私がたった一人。当然、話題は「どこから来たの？」ということから始まる。

只見からと知った山荘のご主人の言葉。

「今年の六月末に鬼面山に登ったけれど、あんなにきれいなヒメサユリは見たことがない」。

私の頭の中はたちまち、まだ小学校に上がらない小さなころのヒメサユリの記憶でいっぱいになった。

その日、田んぼで働く両親のそばで遊ぶのにも飽いた私は、すぐ近くの裏山にいてみることにした。登り始めるとすぐに「お諏訪様」というお社があり、その道下の、子どもにしては下りるも登るも大変な沢をおそろおそろ越えてみた。

するとそこには、幼い私の背丈よりは少し低い丈の、香しい薄いピンクの百合の花



が一面に広がっていたのである。私は小躍りしながら端から端へ通り抜け、いちばん端っこに咲いていたオケツツジ（ウラジロヨウラク）のいい香りも嗅いだ。ひと通り眺め終わると、今度は父や母に見せたくて、やっとの思いで一本一本へし折り、両手いっぱい抱えて山を下りた。

鬼面山^{キメンザン}と言う名の山は全国にいくつかあるが、福島県と新潟県の県境にまたがるこの山を、只見ではオニガツラヤマと呼んでいる。1500メートルにも満たない山ながら、只見の町から眺めると正に鬼のようにそそり立ち、他を寄せ付けぬ厳しさがある。しかも、私が若い頃に大きな事故があって、あこがれの山ではあるが私には登れない山、と決めつけていて登ったことがなかった。



浅草嶽から眺める鬼面山

そんな頑なな気持ちも、平標山荘のご主人の言葉から一瞬に氷解してしまい、その年のさわやかな初秋のある日、とにかく一度登ってみることにした。

新潟県に抜ける六十里峠の県境近くの登山口から登り始める。

最初はガレ場の急斜面だが、ほどなく、その昔、田子倉から越後へ抜けた六十里峠跡や、自然の中には何ともそぐわない電源開発（株）の巨大な鉄塔もあり、比較的登りやすい登山道になっている。

道脇には常緑のヤマグルマが目立ち、足元には、教えてもらったばかりのミクニサイシン、花の終わったサンカヨウやツバメオモト、瑠璃色のオオツチハンミョウの姿も見つけた。目の前にはまだ色の薄いアキアカネがたくさん飛び交っていた。



ヤマグルマ

地元ではモチノキとも言い、樹皮でトリモチを作っていた。新潟に運ばれて船の接着剤にも使われたと聞いている。



ミニサイシン

ブナ帯を抜けると、いよいよ福島県側の危険極まりない絶壁と新潟県側のなだらかな稜線とがせめぎ合うところに至る。と思いきや、尾根には低木が生い茂っており、さほどの危険は感じない。「これなら行ける。」とばかり進んでいくと、ポツンポツンと咲き終わったヒメサユリの姿が現れはじめた。

途中からは終始、浅草岳の穏やかな姿が望まれる。新潟県側は越後三山はじめ越後の山々、眼下には紺碧の田子倉湖。人影もまばらな登山道を、ヒメサユリを探しながら南岳を越え、山頂への道を楽しんだ。

翌年の六月末、その次の年の六月末も、里に咲くヒメサユリよりも色濃く、背丈も小さな山のヒメサユリを思いっきり愛でることができた。残念ながら鬼面山は秋とは違ってヒメサユリを愛でる人でいっぱいだけれど、これだけの自生のヒメサユリを見ることができるのは他にないと思えるから致し方ない。只見町は自生のヒメサユリが日本で一番多いのだという。

日本固有種で、特に、咲く地域が限られているヒメサユリが日本一ということは、世界一ということなのだ。

後年、父と母は、ヒメサユリを抱えた私を、「あんなにうれしそうな顔は見たことがない。」と口をそろえて言っていた。しかし母は、

「しんじゃけども、にしゃ採ってきたサユリは、ほとんど花瓶にも飾れなかった。」と付け加えた。

それはそうだ。大人の手でもヒメサユリを手折るのは難しい。まして小さな子どもの手。どうやってへし折って持ち帰ったかは記憶にない。



ヒメサユリの群落が続く